

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平9-140276

(43) 公開日 平成9年(1997)6月3日

(51) Int.Cl.⁶

A 0 1 G 13/04

識別記号

庁内整理番号

F I

A 0 1 G 13/04

技術表示箇所

審査請求 未請求 請求項の数1 F D (全 4 頁)

(21) 出願番号 特願平7-325205

(22) 出願日 平成7年(1995)11月21日

(71) 出願人 594201249

最上 正太郎

神奈川県鎌倉市玉縄一丁目11番14号

(72) 発明者 最上 正太郎

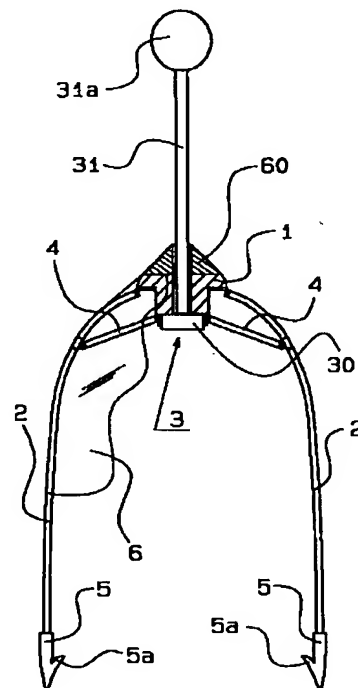
神奈川県鎌倉市玉縄一丁目11番14号

(54) 【発明の名称】 植物防寒保護用の傘

(57) 【要約】

【課題】小さな苗等を寒さから守り、不使用時にはコンパクトに折り畳むことができ、使い勝手のよい植物防寒保護用の傘を提供する。

【解決手段】親骨(2)が、操作桿(31)を押し込んだときに上ろくろ(1)の中心軸の周りに収束され、牽引したときに上ろくろ(1)を頂点としてドーム状に開かれる。傘を開いた状態でアンカー(5)を地面に突き刺し、プラスチックフィルム(6)に囲まれた空間内にある苗を寒さから保護する。



【特許請求の範囲】

【請求項1】下記の(a)～(e)の構成要素から成る植物防寒保護用の傘。

(a) 中央に開口(1a)を有する円環状の上ろくろ(1)。

(b) 一端が上ろくろ(1)に傾動自在に結合され、上ろくろ(1)を頂点としてドーム状に開かれた状態と、上ろくろ(1)の中心軸の周りに収束された状態との間で開閉される複数の親骨(2)。

(c) 略円盤状の本体部(30)とその本体部(30)の中心軸に沿って伸びる操作桿(31)とから成り、操作桿(31)が上ろくろ(1)の中央開口(1a)から外方に突出するように、その本体部(30)が親骨(2)に囲まれた空間内に設けられる下ろくろ(3)。

(d) それぞれその一端が親骨(2)の上ろくろ(1)寄りの適所に連結され、他の一端が下ろくろ(3)に接続され、下ろくろ(3)の操作桿(31)が外方に牽引されたとき、親骨(2)をドーム状に開くと共に、その本体部(30)が上ろくろ(1)に接触する位置に達したとき、その親骨(2)から受ける抗力が下ろくろ(3)を上ろくろ(1)に押し付ける方向に作用するよう構成された支骨(4)。

(e) 親骨(2)の自由端側の一定長さ部分を残して親骨(2)の外側に張られるプラスチックフィルム(6)。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、鉢植えや露地植えの小型の植物を寒さから守るために使用する植物防寒保護用の傘に関する。

【0002】

【従来の技術】熱帯性又は亜熱帯性の植物にとって冬場の冷え込みは大敵であり、冬場は枯死させないように防寒してやらなければならない。このため、鉢植えのものは、温室に取り込んで管理することが望ましいが、温室は高価な上、ある程度広い場所が必要であり、気軽に作って利用することはできないという問題があった。

【0003】このため、適当な大きさの枠体に、その枠体に対応する形状のビニール袋を被せ、その中に鉢植えを入れるようにする無加温式のフレームもあるが、充分な保温ができないという問題があった。そこで、冷え込みが厳しい間は鉢植えを屋内で管理して、植物を寒さから守るようにすることが多いが、この屋内での管理は通常の生活に支障を来す上、真冬の夜半から明け方にかけてはかなり冷え込むので、特に寒さに弱い植物の場合、夜間、ダンボール箱や発泡スチロール箱等を被せて保温しなければならなかった。

【0004】しかし、箱を被せた場合、見栄えが悪い上、箱の内部の植物には成育に必要な光が届かないため、日中は必ず箱から出してやらなければならない、面倒

臭く、また、箱が嵩張るので日中の箱の置き場所にも困るという問題があった。一方、露地植えの植物の防寒対策としては、冷たい風が直接吹き付けないようその周囲に囲いを設けることが考えられるが、これには相当の熟練を要し、手間がかかる上、小さな苗や鉢などには適さないという問題があった。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】本発明は上記の問題を解決するためになされたものであり、その目的とするところは、見栄えがよく、小さな苗や植木鉢等に対して簡単に使用でき、不使用時にはコンパクトに折り畳むことができ、使い勝手がよい植物防寒保護用の傘を提供することにある。

【0006】

【発明を解決するための手段】上記の目的は、下記の(a)～(e)の構成要素から成る植物防寒保護用の傘によって達成される。

(a) 中央に開口を有する円環状の上ろくろ。

(b) 一端が上ろくろに傾動自在に結合され、上ろくろを頂点としてドーム状に開かれた状態と、上ろくろの中心軸の周りに収束された状態との間で開閉される複数の親骨。

(c) 略円盤状の本体部とその本体部の中心軸に沿って伸びる操作桿とから成り、操作桿が上ろくろの中央開口から外方に突出するように、その本体部が親骨に囲まれた空間内に設けられる下ろくろ。

(d) それぞれその一端が親骨の上ろくろ寄りの適所に連結され、他の一端が下ろくろに接続され、下ろくろの操作桿が外方に牽引されたとき、親骨をドーム状に開くと共に、その本体部が上ろくろに接触する位置に達したとき、その親骨から受ける抗力が下ろくろを上ろくろに押し付ける方向に作用するよう構成された支骨。

(e) 親骨の自由端側の一定長さ部分を残して親骨の外側に張られるプラスチックフィルム。

【0007】

【作用】上記の如き構成であると、植木鉢や露地に植えられた小型の植物を簡単に寒さから守ることができる。

【0008】

【発明の実施の形態】以下、図面により本発明の詳細を説明する。図1は本発明に係る植物防寒保護用の傘の一実施例を閉じたときの状態を示す説明図、図2は図1に示した傘の開いた状態を示す説明図である。なお、図には、図を簡略にするため、一対の親骨の開閉作動状態のみを示してあるが、実際にはこの親骨は3ないし6本設けられているものである。また、プラスチックフィルムは図2にその一部を示し、他の部分については省略した。図中、1は上ろくろ、2は親骨、3は下ろくろ、4は支骨、5はアンカー、6はプラスチックフィルムである。

【0009】まず、図1について説明する。上ろくろ1

は、中央に開口1aを有する円環状の部材である。親骨2は弾性に富むプラスチック製の骨材であって、その一端が上ろくろ1の外周面に傾動自在に結合されるものであり、上ろくろ1の外周面から等間隔かつ放射状に伸びるよう4本設けられ、上ろくろ1を頂点としたドーム状になるよう湾曲し得るものである。

【0010】下ろくろ3は、円盤状の本体部30と、本体部30の一面からその中心軸に沿って伸びる操作桿31とから成る。この操作桿31は、その径が上ろくろ1の中心開口1aを貫通し、その自由端には、握り球31aが取り付けられる。この握り玉31aは、操作桿31を上ろくろ1の開口1aに挿通した後、取り付けられるものであり、下ろくろ3は、上ろくろ1の中心軸に沿って移動自在に保持される。

【0011】支骨4は親骨2に対応して設けられ、それぞれその一端が親骨2の上ろくろ1寄りの適所に、他の一端が下ろくろ3に接続される。この支骨4は、下ろくろ3の操作桿31を下方へ押し込んだ状態のときには、図1に示したように、親骨2にストレスを与えることなくそれを上ろくろ1の中心軸の周りに収束した状態に保持しているが、操作桿31を上方に牽引すると、親骨2を押し開き、図2に示したように、それをドーム状に湾曲させるものである。操作桿31を支骨4、4が一直線となる位置を越えて引き上げると、親骨2から支骨4に作用する圧縮力は、本体部30を上方、即ち、上ろくろ1の方向に押圧するよう作用するようになるので、下ろくろ3の本体部30は、上ろくろ1に押し当てられ、これによって傘は開かれた状態に保持されることになる。

【0012】アンカー5は、各親骨2の先端にそれぞれ嵌められるものであり、先端が鋭く、先端付近には、親骨2に嵌めたときに、傘の内側に向かって突出するかかり5aを有するものである。プラスチックフィルム6は、親骨2の外側に張られる透明なものであり、中央に操作桿31を通すための孔を有し、その孔の周縁には、径が上ろくろ1と同程度の樹脂製の補強具60が熱接着され、外縁が各アンカー5に固定される。このプラスチックフィルム6は、補強具60を上ろくろ1に重ねた上で、各アンカー5をそれぞれ親骨2の先端に嵌めることにより取り付けられる。プラスチックフィルム6は、親骨2がドーム状に開かれたときは、その外側にピンと張られ、風雨を防ぐものである。

【0013】この植物防寒保護用の傘は、操作桿31を外方に牽引して傘を開き、寒さから守りたい植物に上から被せ、アンカー5を地面に突き刺し、固定して使用するものである。このとき、この傘は、そのアンカー5が地面に確りと突き刺さっているため、少々風に煽られても抜けて吹き飛ばされることはなく、植物を確実に寒さから守るものである。また、この傘を片づけるときは、これを地面から抜いて、操作桿31を押し込んで畳めば、細長く、コンパクトに纏まるものであり、置き場所に困ることもない。

【0014】なお、本発明は叙上の実施例に限定されるものではなく、例えば、プラスチックフィルムは、直接親骨の適所に固定するようにしてもよく、また、親骨及び支骨の長さや本数、連結方法、また、上ろくろ及び下ろくろの形状等は、本発明の範囲内で適宜に変更できるものであり、本発明は上記の説明から当業者が容易に想到し得る総ての変更実施例を包摂するものである。

【0015】

【発明の効果】本発明に係る植物防寒保護用の傘は叙上の如く構成されるので、本発明によるときは、不使用時に置き場所に困ることもなく、簡単に植物を寒さから守ることができる。

【図面の簡単な説明】

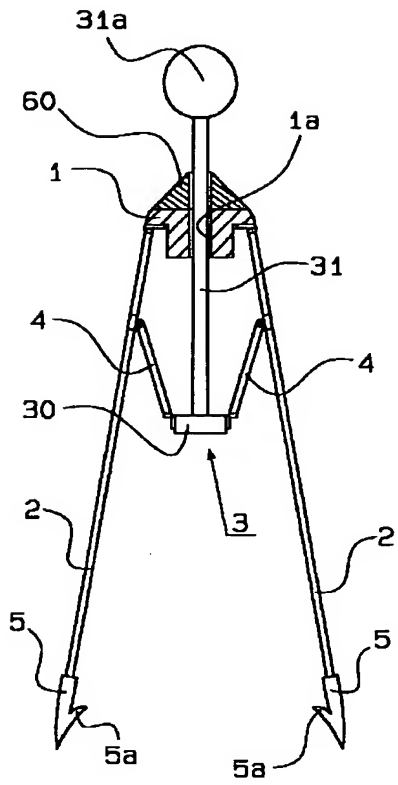
【図1】本発明に係る植物防寒保護用の傘の一実施例を開じたときの状態を示す説明図である。

【図2】図1に示した傘の開いた状態を示す説明図である。

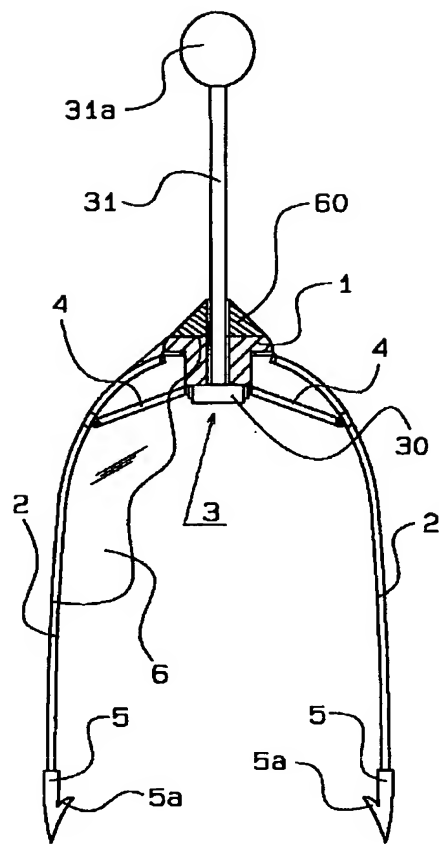
【符号の説明】

- 1・・・上ろくろ
- 1a・・・開口
- 2・・・親骨
- 3・・・下ろくろ
- 30・・・本体部
- 31・・・操作桿
- 31a・・・握り玉
- 4・・・支骨
- 5・・・アンカー
- 5a・・・かかり
- 6・・・プラスチックフィルム
- 60・・・補強具

【図1】



【図2】



PAT-NO: JP409140276A

DOCUMENT-IDENTIFIER: JP 09140276 A

TITLE: UMBRELLA FOR PROTECTING PLANT FROM COLD

PUBN-DATE: June 3, 1997

INVENTOR-INFORMATION:

NAME

MOGAMI, SHOTARO

ASSIGNEE-INFORMATION:

NAME

COUNTRY

MOGAMI SHOTARO

N/A

APPL-NO: JP07325205

APPL-DATE: November 21, 1995

INT-CL (IPC): A01G013/04

ABSTRACT:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide an umbrella for protecting plant from cold, capable of preventing small seedlings, etc., from cold and compactly folding it and having good usability.

SOLUTION: In this umbrella, parent bones 2 are made to converge around the central axis of the upper umbrella hub 1 when an operating lever 31 is pushed down and the parent bones 2 are opened in dome-like shape using the upper umbrella hub 1 as the top when the operating lever 31 is pulled and anchors 5 are pierced to the ground in a state in which the umbrella is opened to protect the seedlings which exist in a space surrounded by a plastic film 6 from cold.

COPYRIGHT: (C)1997,JPO